

途上国の教育開発におけるエンパワメントを 目的とする識字教育の特質と課題

ーリフレクト・プログラムを事例としてー

河内 真美

1. 本研究の目的と方法

本研究の目的は、非政府組織（以下、NGO）のアクションエイドが中心的に実施しているリフレクト・プログラム（以下、リフレクト）を事例に、途上国の教育開発におけるエンパワメントを目的とする識字教育の特質と課題を明らかにすることである。これは、「プログラムに対する学習者の関わり方」という視点から理論と実践を見ることで導き出す。この目的と視点は、識字教育において、学習者の知識や価値観、意図をどこまでプログラムに反映できるのか、また反映させるべきなのかという問いに基づく。換言すれば、実施者の価値観や意図に基づき識字教育プログラムを構成することをどこまで認めるのか、また認めるべきなのかということである。識字教育は、文字の読み書きを中心とする教育である一方で対象が成人であるため学習という側面もあること、またそれを主に実施するのがNGOという比較的自由に他国・他地域で活動できる主体であることのふたつの理由から、実施者の価値観や意図のみに基づいて行うことが正当化されない領域であるからである。上記の問いに答えていく手がかりとして、本研究では学習者の主体性を謳うエンパワメントを目的とする識字教育に焦点をあてる。

今日の国際社会では、識字教育の目的をエンパワメントとすることが顕著であるが、エンパワメントとはどういう概念で、それは識字教育の目的として適切であるのかという点については検討されていない。そのなかで「エンパワメントは良いものである」という認識のもと、無批判に目的化されている。この認識とエンパワメント概念の内実が多様であるという実情から、識字教育の目的がエンパワメントとなることの意味について先行研究は明らかにしていない。

しかし、識字教育は教育という意図的な営みであり、ゆえにそれは学習者の価値観形成に大きく関わるものである。そのため、「プログラムに対する学習者の関わり方」という点において、エンパワーメントを目的とすることが識字教育にどのような影響を与えるのかを問う必要がある。不問に付されてきたこの問いに、理論と実践の双方から答えることに本研究の意義がある。

本研究では、①国際的な理念と政策に見るエンパワーメントを目的とする識字教育の特質、②エンパワーメント概念の枠組み、③理論に見るエンパワーメントを目的とする識字教育の特質と課題、及び④リフレクトの特質と課題の4点を明らかにすることを課題とした。これらは主に文献研究により取り組むが、課題④に関しては筆者が実施した現地調査で得られたデータも使用する。事例としてリフレクトを選択したのはその代表性による。その根拠は次の2点にある。すなわち、①地理的及び組織的な広域性を持つこと、そして②プログラムの理論的枠組みにおいて、学習者の主体的な関わりを識字教育内容の選択・決定にまで拡大していることである。これらから、特に「プログラムに対する学習者の関わり方」という視点から見ると、リフレクトはエンパワーメントを目的とする識字教育として「典型的」ではないが「代表的」であると言え、本研究から明らかになる特質と課題は他のプログラムに対する汎用性が高いと考えられる。

2. 論文の構成

序 章

第1節 本研究の目的と意義

第2節 研究の方法

第3節 用語の整理

第1章 エンパワーメントを目的とする識字教育の台頭

第1節 「国際社会」における識字教育理念及び政策の枠組み

第2節 エンパワーメントを目的とする識字教育理念の背景

第2章 理論に見るエンパワーメントを目的とする識字教育の特質と課題

第1節 エンパワーメント概念の定義と「力の獲得」

第2節 エンパワーメント概念の要素

第3節 識字教育におけるエンパワメント

第3章 リフレクト・プログラムにおけるエンパワメント

第1節 リフレクト・プログラムの理念及び理論的基盤

第2節 学習者の参加と自己決定による識字教育のための原則

第3節 リフレクト・プログラムの実践に見る特質と課題

終章

第1節 本研究のまとめ

第2節 今後の課題

付録

3. 論文の概要

第1章では、識字教育の目的をエンパワメントとすることが主流化している背景には、次の2点があることを確認した。ひとつは、貧困概念の変化に伴い、開発が「人々の選択肢を広げること」を意味し、その主体は当事者自身であると考えられるようになったことである。もうひとつは、学習者の動機づけや識字獲得に効果的ではなかった過去のプログラムに対する反省と、社会的文脈のなかで識字を捉えることを主張するアプローチの出現により、学習者や地域の文脈の重視傾向が強まったことである。すなわち、①当事者を主体として捉える開発のあり方と、②学習者や地域の文脈を反映した識字教育のあり方の双方を組み込むものとして、エンパワメントを目的とする識字教育が顕著になったのである。従って、国際社会の理念と政策に見るその特質は、学習者の主体性に焦点をあてていること、また識字教育過程を通して学習者の主体性の涵養をめざしていることであると指摘した。

第2章では、エンパワメントは『『より良い』社会の実現をめざし、人々が『奪われた力』を取り戻すことを通して、自分自身の生活に対する自律性を高めていく過程』と定義されることを確認した。またその構成要素として①力の獲得、②意識と行動の変容、③価値志向性、④自己決定の4点を抽出した。そして、自信や自尊心など心理的な力の向上に必要なとともに、自己決定力の行使自体がエンパワメントの目的である自律性を高めることになるため、4つの構成要素のなかでも自己決定が必須要素であるとした。その点に着目すると、学習者の

エンパワーメントが生じるためには、識字教育過程が学習者の自己決定に基づいて進められる必要があることが明らかとなる。それゆえに、プログラムに対する学習者の主体的な関わりの拡大が、識字教育には求められると指摘した。その一方で、識字教育が教育という点でも、途上国の（教育）開発において実施されるという点でも実施者による意図的な営みであることを鑑みると、学習者の自己決定が尊重されるのはその内容が実施者の価値観に合う限りとなり、学習者の関わりの拡大には制限がかかることを指摘した。以上を整理すると、理論に見るエンパワーメントを目的とする識字教育の特質は、プログラムに対する学習者の関わりが広がる一方で、そのなかでの学習者による自己決定が可能な範囲は実施者により制限されるということである。しかしこれは「当事者がエンパワーメントの方向性を措定すべき」とする理論的立場とは矛盾するため、実施者による制限をいかに抑えるかが課題となる。

第3章では、リフレクトは、学習者の議論を通して識字教育内容を作ることを可能にするなど、プログラムに対する学習者の主体的な関わりを最大限に拡大するプログラムであることを明らかにした。しかし、「学習者の主体性を尊重し、学習者の知識や価値観をプログラムに反映する」という理念は、必ずしも実践では反映されていないことを複数の事例から確認した。例えば、バングラデシュではダウリ（新婦持参金）制度について、女性の学習者は、新婦を出す家計を苦しみ、また女性を金銭と引き換えに捉えるものであるから廃止すべきだという見方と、息子を持つ母親を中心に女性自身が恩恵を受けており支持する面もあるという両方の見方を持っていた。しかし、ジェンダー平等の観点からダウリ制度は「良くない」とするアクションエイド職員らの意向により、リフレクトでは廃止すべきとする見方のみが「女性の声」として取り上げられた。これらからは、実施者の価値観と合わない、あるいは逆行する学習者の価値観はプログラムで扱われないという状況が生じていることが分かる。

以上の理論（第2章）と実践（第3章）に共通するのは、自己決定や知識・価値観の反映として発現する学習者の主体性が認められる度合いは、実施者の価値観により決定されるという構図である。識字教育プログラムで尊重される学習者の自己決定は、あくまでも実施者の価値観に合う限りでの「自己決定」でしかな

い。ただし、その構図自体に問題があるかどうかについては本研究では判断できない。しかし、エンパワメントを目的とする識字教育は学習者の主体性に基づいているということのみが主張される現状を見ると、一つの問題が浮かびあがる。それは、プログラムを通して起きた学習者の意識や行動の変化は学習者の自己決定の結果となり、そこに実施者の価値観が介在することが隠れて、あるいは隠されてしまうことである。それらの変化の責任は学習者自身にあり、実施者にはないとする構図が生じる。これは、実施者による特定の価値観への促しが起きても、それが学習者の主体性・自己決定のもとに無批判に「良いもの」となる可能性を示唆する。つまり、実施者の主導性を隠すために、エンパワメントを目的にするという事態が起きうる。教育が学習者の価値観形成に大きく関わることを鑑みるならば、そこに実施者の価値観が介在が見えなくなり、どのような価値観への促しも可能になることは危険である。ここでは「実施者の価値観が介在が見えなくなる」ことこそが問題なのである。学習者の主体性を謳うエンパワメントを目的とする識字教育には、実際には実施者の価値観が介するにも関わらず、それを見えなくしてしまうという問題がある。

以上を踏まえ本研究では、エンパワメントを目的とする識字教育の特質として、プログラムに対する学習者の主体的な関わりが拡大する一方で、学習者が提示できる内容には実施者の価値観による制限がかかるという二面性を指摘した。そしてその課題は、実施者の価値観の介在が見えなくなる危険性をどう回避するのかということになる。このためには、まず実施者の意識変容が必要となる。すなわち、識字教育プログラムに実施者の価値観が介在すること、そして学習者の意識や行動の変化の責任は実施者にもあることを自覚して、プログラムを実施することが実施者には求められるのである。

4. 今後の課題

本研究の根底にある問いとは、「識字教育において学習者の知識や価値観、意図をどこまでプログラムに反映できるのか、また反映させるべきなのか」ということであった。この問いに、本研究ではエンパワメントという視点から答えた。そしてこの視点からは、学習者の知識や価値観、意図は最大限に反映すべきであ

るが、識字教育の文脈を踏まえると反映できる内容は実施者の価値観に合うものに限られるという答えが得られた。しかしこれはただ理念との矛盾なのか、それとも問題であるのかは判断できなかった。それは「どこまで学習者の知識や価値観をプログラムに反映すべきか」という問いの答えを今のところ持ち合わせていないからである。

学習者の知識や価値観をプログラムに反映させる重要性の根拠が「学習者のため」にあるならば、「どこまで」という限界は、「学習者のため」という視点から定める必要がある。しかし、何が「学習者のため」であるのかには様々な立場があり、そのなかでどの立場が適切であるのかを明らかにしなければならない。以上を明らかにし、それを踏まえて「どこまで学習者の知識や価値観をプログラムに反映させるべきか」という問いに答えていくうえでは、識字教育及び成人学習の視点が必要である。それは識字教育には、前述したように教育という要素と、学習という要素が存在するからである。これらはそれぞれ実施者の価値観、学習者の価値観を表すと捉えると、「どこまで学習者の知識や価値観をプログラムに反映させるべきか」という問いは、教育と学習という2つの要素のバランスをどのようにとるべきかという問いに言い換えることができる。それゆえ、識字教育及び成人学習という視点から上記の問いに答えていくことが今後の課題である。

5. 主要参考文献

- 久木田純「エンパワーメントとは何か」(『現代のエスプリ』<副題：エンパワーメントー人間尊重社会の新しいパラダイム>、至文堂、No.376、1998年)、pp.10-34。
- Archer, David, and Cottingham, Sara, *Action Research Report on REFLECT—Regenerated Freirean Literacy through Empowering Community Techniques: The Experiences of Three REFLECT Pilot Projects in Uganda, Bangladesh, El Salvador*, Department for International Development, Education Paper No.17, London, 1996.
- Friedrich, Marc, and Jellema, Anne, *Literacy, Gender and Social Agency: Adventures in Empowerment*, Department for International Development, Education Paper No.53, London, 2003.